

平成29年3月27日

「この人に聞く」成熟社会と建築

松隈 洋（まつくま・ひろし）氏



プロフィール 1957年兵庫県出身、京都工芸繊維大学教授。1980年京都大学工学部建築学科卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。2000年4月京都工芸繊維大学助教授に着任、2008年10月より現職。博士（工学）。専門は近代建築史、建築設計論。文化庁国立近現代建築資料館運営委員。著作に『建築から都市を、都市から建築を考える』（共著・岩波書店）、『前川國男—現代との対話』（六耀社）、『モダニズム建築紀行—日本の戦前期・戦後1940～50年代の建築』（六耀社）、『ル・コルビュジエから遠く離れて—日本の20世紀建築遺産』（みすず書房）、『建築の前夜—前川國男論』（みすず書房）ほか多数。

（前文）

現在、DOCOMOMO Japan 代表を務められる、松隈洋氏に、残すべき建築とその意義について伺った。

■DOCOMOMO の思想と 20 世紀の建築

DOCOMOMO がオランダで始まったのが 1988 年で、DOCOMOMO Japan の正式参加が 2000 年です。当時、モダニズムと言われる、鉄、ガラス、コンクリートでできた 20 世紀の建築、いわゆる工業化以降の建築が余り重要視されず、世界各国で次々に姿を消していく状況にあって、それまで全く顧みられなかった 20 世紀の建築に光を当てようという動きがありました。ただし、どのような位置づけのものがそうした建築物にあたるかは曖昧な部分があって、DOCOMOMO からの指定も非常に抽象的で「技術的な革新があって、時代を切り開いた代表的な建築」とした括りで漠然としたものでした。そのため、国によって選び方がかなり違っていてそれぞれ特徴的なのですが、そこから近代建築を各国でどう捉えているのかが見えてきます。

日本の場合、関東大震災以降の震災復興が大きな起点になっていて、それまでのれんが造、木造の建物が倒壊、焼失してしまったところに、ちょうど日本に入ってきたモダン・ムーブメントの動きが重なります。都市を不燃化して、安心して暮らせるまちづくりを目指すのにタイミン

グよく、装飾のない、非常に機能的で合理的な建築をつくろうという動きが重なり、それが 1930 年代に広がっていき、都市の姿の基礎を形づくったと言えるでしょう。

そして、戦争で一時中断されますが、戦後復興の時期に再び息を吹き返して、前川國男、丹下健三、坂倉準三、その後続く人たちが 1950 年代に、公共建築を中心にモダニズムの建築をつくり始める。その後高度経済成長によって、より大型な都市を形づくる建築物が生まれ、オイルショックまでが都市形成の歴史の一つの節目と見ることができます。この歴史観に基づき、DOCOMOMO Japan での議論の中で、1920 年代から 60 年代までの公共建築を中心とする、街角に建っている、近代という制度をつくり上げたもの、郵便局、オフィスビル、文化会館と選んでいって、最初の 20 件を選定したのです。

■リビングヘリテージ

これまで保存されてきたものは、東京駅を含め洋式建築が多かったのですが、モダニズムの建築になって以降は、むしろもっと普段使いしている、そこら辺にあるような建物をどうにかしてよいコンディションで長く使っていくかに切り替わっている印象です。世界遺産も含めて、20 世紀の遺産の特徴は当たり前に使われていることで、フィンランドのペタヤヴェシの教会のように、世界中から見に来るけれども、日常で普段使いしている建物を「リビングヘリテージ (生きている遺産)」と呼んでいます。建物はこのように使われていくのがすごく幸せなのだろうと思います。

ここで重要なのが、その建築ができた背景とか、そこに設計の考え方がどう込められていたのか、どういう時代精神の中でそれが生み出されたのかといった情報がしっかり共有できていることです。言い換えれば、ある建築が生み出されるときに込められた思いが、建築に結実していて、その建築が設計者や施工者の手を離れて実際に使われていく中で、どのくらい愛されたのかという、そこに建築の一番重要な論点があるわけです。その上でこの建物を長く愛されるように使いたいという意識の共通基盤があって初めて実現されます。ただし、現在日本ではこうしたことが社会的に十分に共有されておらず、何かと経済的事情に巻き込まれ見失われがちです。

現在、日本では建築の寿命が短く、メディアでも 50 年経てば建替えが当たり前のように語られます。本来、建築は世代を超えて伝えていく性質を持ち、世代を超えて使われることで初めて建築が意味を持つてく

るし、街並みとしても成熟していく。つまり様々な文化を伝える器としてつくられてきたものなのです。

■愛される建築、残していくべき建築

日本の建築の歴史において、戦災復興、震災復興抜きには語れません。最近でも、東日本大震災、熊本地震を目の当たりにして、その印象を強くしています。そういう時期の建物を見ると、建築が社会を支え、人々を守る、その原点みたいなものが込められているのが分かります。

現在、僕が免震工事に関わっている香川県庁舎も、高松が一度は空襲で焼け野原になったものの、戦後復興の象徴として庁舎をつくりたいと、金子知事が丹下健三に依頼した。丹下は、「戦前の庁舎建築と違う、戦後の民主主義のシンボルになるような場所をつくろう」と、偉そうな庁舎でなく、誰もがいつでもそこに気楽に佇んでいられる場所をつくった。そういう時代精神を建築が体現している。やはり建築物が長く愛されるには、時代が求めているものに答えることだと思います。その応え方は、必ずしも更地に新築というものばかりではなく、例えば市町村合併で当初の需要や機能が失われたとしても、別の形で使う道筋をつくっていく方が建築も人々も幸せになる。こうした建築を守り育てていく土壌が生まれてほしいと考えています。

人口減少の時代の中で、モダニズムの建築がつくられた時代と全然違う局面に入りつつあって、今までと同じとはいかないでしょう。そこで、人間や社会が持つエネルギーの総量に限りがあるなら、それをみんなが幸せに暮らせる環境にどう効率良く転換していくか。古い建物でもなるべく長く大事に使えば、社会への負担も将来への負債もないわけで、使えるものを上手に使う知恵を集めていけば、それはそれで幸せに暮らせるのではないか。これは、本来日本が持っていたはずの知恵です。町の建物が少しずつ移り変わっても、全体的に何かが共有されていて、いつもいいコンディションで、決して巨大なもの、豪華なものでもなく、みんながすごく幸せに暮らせる簡素な風景が、これからのモデルになるような気がしています。多分、文明論的なことが問われている時代が来ているのです。

■建築に込められたものを伝えていく

大学の卒業設計もここ数年随分変わってきて、新築よりも、既存の施設を少し手直しして新しくする設計が増えているのです。学生も彼らなりに、今までのような作り方ではない作り方に道があると敏感に反

応にしているわけです。また、単に新しいものが真に新しいのかという疑問を持ち、新しいものがどれも横並びに見えていて、むしろ少し前の、前川國男や丹下健三、アメリカのルイス・カーンや、フランク・ロイド・ライト、そういう建築が今の学生たちにもすごく響くのです。これはまさに、「賞味期限のない建築」になるわけですが、今の建築が果たして数十年後、みんなに愛される建築になっているのだろうか。それを見極める目をきちんと育てていくには、やはり僕たちの時代の建築で、よいものをきちんとみんなが大事にしていって、継続可能なものに循環させていかなければならない。

実際にリノベーション、コンバージョンをやってみると、当時の建築家や技術者の考え方や時代背景、そこにどういう創意工夫をしたのかなどに時代を超えて対話できます。それを社会で共有できるようになればと思っています。丹下の建築は状態がよくないものが多いものの、香川県庁舎は今でもピカピカです。当時金子知事がつくらせた生活困窮の戦争未亡人らによる清掃会社が 50 年間毎日掃除し、それを職員たちもよく覚えている。そうすると庁舎を壊そうという発想になりにくい。2013 年丹下健三展にて、この建築にどういうことが考えられていたか、丹下を始め技術者や職員はどんな仕事をしたのかを知ってもらうなど様々な取り組みが行われて、知事が建て替えずに免震化し普段使いする庁舎として重要文化財を目指そうと目標を掲げて動き出しました。また、町ごとでオープンハウスを行うところも増えてきて、持ち主や地方公共団体が連携して建物を公開しています。こうして建築が人々の目に入ってくるようになると、みんなが建築を大事に扱うようになって、最終的に町がよくなるサイクルにつながっていきます。

この国で建築文化を本来的に育んでいくには、最終的には、教育の問題となってくるでしょう。近代建築史をきちんと教えている大学がいくつあるか、建築が長く愛されるためには何が重要かを教えている大学はほとんどないのではないか。こうした大学の建築教育における課題もあるし、さらに将来的には、小学校の家庭科で、住まい、町、都市といったテーマについて語っていくことができるような環境を整備していくことも必要であると考えています。